

解題：ヒューム道徳哲学における「エッセイを書くことについて」の位置づけと意義⁴

林 誓雄

1. はじめに

今回本誌で訳出したヒュームのエッセイ「エッセイを書くことについて(以下「本エッセイ」と記す)」は、1742年版の『道徳・政治論集』第二巻のみに収められたものである。*The Philosophical Works of David Hume*の編者のひとりであるT・H・グロウスによると、この作品は、週刊の論文集に掲載された一連の諸エッセイのうち、序論としての役

⁴ ヒュームの諸著作への言及・参照については以下の通りである。

『人間本性論 *A Treatise of Human Nature*』(〔邦訳〕デイヴィッド・ヒューム『人性論』1-4巻、大槻春彦訳、岩波文庫、1948-1952年)からの引用・参照は、Selby-Bigge版(ed., by Selby-Bigge, L.A., 2nd Ed Oxford Clarendon Press, 1978)、及びNorton版(eds., by Norton, D. F. & Norton, M. J., 1st Ed., Oxford U. P., 2000)より行なう。略号としてTを用い、初めにNorton版の巻号、章番号、節番号及び段落番号をアラビア数字で順に付し、次にSelby-Bigge版の頁数を付す。日本語訳は筆者によるものだが適宜大槻訳を参照した。

『道徳原理の探求 *An Enquiry concerning the Principles of Morals*』(〔邦訳〕D・ヒューム『道徳原理の研究』渡部峻明訳、哲書房、1993年)からの引用・参照はSelby-Bigge版(ed., by Selby-Bigge, Clarendon Press, 1975)、及びBeauchamp版(ed., by Beauchamp, T. L., Oxford U. P., 1998)より行なう。略号としてEPMを用い、Beauchamp版の節番号をアラビア数字で付した後、Selby-Bigge版の頁数を付す。訳は筆者によるものだが適宜渡部訳を参照した。

諸エッセイの引用・参照はMiller版『道徳・政治論集 *Essays Moral, Political, And Literary*(ed., by Miller, E. F., Revised Edition, Liberty Fund, 1987)』(〔邦訳〕ヒューム『市民の国について(上・下)』、小松茂夫訳、岩波文庫、1952年、1982年)より行なう。引用・参照の際には、略号としてEを用い、その後に頁数を付す。日本語訳は筆者によるものだが適宜小松訳を参照した。

割を担うことを意図されて書かれたものであった⁵。しかし、1742年の版を最後に、本エッセイは再録されることなく姿を消してしまう⁶。そのためか、これまで本エッセイはほとんど注目されてこなかった⁷。そしてまた日本においても、『道徳・政治論集』の翻訳リストの内に含まれることは、これまでになかったのである⁸。

しかしながら、1742年版『道徳・政治論集』第二巻の第一エッセイである本エッセイは、同巻に所収された他の諸エッセイが、どのような目的のために書かれているのか、さらに言えば、ヒュームが拘ったことでも有名な「エッセイ」という^{スタイル}文体を用いることそれ自体が何を意味しているのか、ということを理解するために重要な作品であると言えるだろう。だが本エッセイの重要性は、この点よりもむしろ、「社交 society」や「会話 conversation」というものが中心的に語られている

⁵ Grose, T. G. [1882] *The Philosophical Works Of David Hume*, in 4 vols., vol. 3, eds., by Green, T. H. & Grose, T. H., London, 1882-6, reprinted, Scientia Verlag Aalen, 1964, p.43

⁶ Miller[1987]pp.xii-xiiiを参照。

⁷ 例外的に本エッセイに触れているものとして、鷲田清一[1999]『「聴く」ことへの力』TBSブリタニカ、pp.35-6; 勢力尚雅[1999]「ヒューム道徳哲学における「人間愛」の生成と発展」『イギリス哲学研究』第22号、日本イギリス哲学会、pp.53-67; 坂本達哉[2002]「スコットランド啓蒙における「学問の国」と「社交の国」」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』第22号、一橋大学社会科学古典資料センター、pp.8-15; Finlay, C. J. [2007] *Hume's Social Philosophy—Human Nature and Commercial Sociability in A Treatise of Human Nature*, Continuum; 水谷雅彦 [2008]「だれがどこで会話をするのか 一会話の倫理学へ向けて」『実践哲学研究』第31号、京都大学実践哲学研究会、pp.1-18を参照。

⁸ しかしながら、本エッセイ単独の全訳は、すでに柘植尚則[1997]によって公表されている(「[翻訳]D・ヒューム「エッセイを書くということ」」『臨床哲学ニューズレター』創刊号、大阪大学文学部倫理学研究室、pp.103-6)。従って、今回の本翻訳は「新訳」の発表ということになる。

点にあると考えられる⁹。社交や会話(以下「社交・会話」と記す)とは、「産業社会＝商業社会として発展する文明社会¹⁰」において、そこに住まう人々が興じるものとして、ヒュームが経験・観察したものである。このことから、「社交・会話」は、「文明社会 civilized society」を特徴付けるもののひとつとして語られていると考えることができるだろう。そして、この「社交・会話」は、一般に「文明社会論」が展開されていると言われる『道徳・政治論集』にしか登場しないわけではない¹¹。すなわち、「社交・会話」は、ヒュームの最初の哲学的著作にして主著とされる『人間本性論』、そして『道徳原理の探求』[1751]においても頻出する。しかも、それぞれの著作において「社交・会話」は、人々が意見や感情を取り交わしながら「道徳 morals」というものを生成していく場として登場するのである¹²。そうすると、仮に「社交・会話」を、ヒュームの道徳哲学全体を貫くキーワードのひとつとして捉えることができるならば、とりわけ『人間本性論』『道徳原理の探求』と、『道徳・政治論集』との間にあるとされる間隙を、このキー

⁹ 社交や会話というものが、哲学・倫理的観点から考察されることは、これまでにほとんどなかったと言ってよいだろう。しかしながら、近年京都大学大学院文学研究科倫理学専修において、水谷雅彦教授を中心として「会話の倫理学」研究が進められている。そのような中、哲学者ヒュームが「社交・会話」を中心的に論じている点は、「会話の倫理学」研究にとって、極めて注目すべきものと言える。

¹⁰ 坂本[2002]p.10

¹¹ これに対し坂本は、「文明社会論」が、『人間本性論』の後にヒュームが出版した諸作品の基本的性格に他ならないという(坂本達哉[1995]『ヒュームの文明社会— 勤労・知識・自由 —』創文社、p.27)。

¹² 『人間本性論』に限って言えば、例えば T 3.3.1.18; SBN583-4, T 3.3.3.2; SBN602-3, T 3.3.3.9; SBN606 を参照。

ワードに着目することによって埋めることが可能になるかもしれない。言い換えれば、「社交・会話」という視座からヒュームの諸著作を見直すことで、それらを地続きのものとして捉えることが可能になり、それによってヒューム哲学に新たな光を投げかけることができるかもしれない。そのような意味で本エッセイは、ヒューム道徳哲学を理解するための重要な作品のひとつとして、あるいはヒューム道徳哲学のさらに深い理解をもたらすものとして、位置づけられることができると思われるのである。

そこで本解題では、「エッセイを書くことについて」にて語られている内容について、『人間本性論』、『道徳原理の探求』および『道徳・政治論集』所収の他の諸エッセイで語られている内容との対応関係を見ながら、解説することにした。

2. 「学問の国」と「会話の国」

ヒュームは本エッセイの前半(1段落-5段落)において、まずは人々を大きく2種類に、すなわち「獣じみた生活」を送っている人々と、「上品な部類の人々」との2種類に分ける(1段落)。この大きな区分は、『道徳原理の探求』においても確認することができる。

人々がその時間の大部分を会話や訪問や集會に費やす国々においては、このようないわば人付き合いのよい *companionable* 性質は、高

く評価され、人物の価値の主要な部分を形成する。人々がどちらかと言えば家庭内のみの生活を送り、仕事に従事するか、知人から成る、より身近な人々 narrower circle の中で楽しむかのどちらかであるような国々では、より堅実な性質が主に顧慮される。(EPM 8.4; SBN262)

『道徳原理の探求』における人々の中の違いは、「国ごとの違い」として描かれている。これに対し、本エッセイで語られている人々の中の違いは、「人間というもの一般の違い」として、あるいは「一国内に見られる人々の中の違い」として捉えることも可能だろう¹³。

とはいえ、上記の大きな区分が本エッセイにおいて重要なのではない。むしろ、2種類の区分のうちの後者、つまり「上品な部類の人々」をさらに2種類に分けるところから、本エッセイ前半の主題的議論が始まることになる。すなわち、ヒュームは「上品な部類の人々」を「学識者たち the Learned」と「会話する人々 the Conversible¹⁴」とに分け、それぞれの人々が住まう世界を「学問の国」と「会話の国」とする。そして、この「学問の国」と「会話の国」との間のあるべき関係こそが、本エッセイ前半における主題となる。

¹³ 坂本は、ここでの区分をヒュームの読者層に関わるものとして捉えた上で、具体的に前者を「生活苦に迫られる労働貧民」、後者を「新興の諸階層(商工業者、法律家、ジャーナリストなどの専門職)」であるとしている(坂本[2002]p.10)。

¹⁴ 「会話する人々」という語が、可能形容詞の名詞化であるという点については、水谷[2008]p.2を参照。

ここで、「会話」において語られる内容について、少し掘り下げて考察しておきたい。なるほど、会話のテーマについては、後になって「社交・会話」がくだらない「おしゃべり Chat」に墮することを防ぐために、歴史、詩歌、政治、あるいは哲学の諸原理などが、談話のテーマとして、「学問の国」から輸入されねばならないと言われる(2 段落)。しかしながら、そのようにテーマは多岐にわたりながらも、語り合われるテーマの本質に存するものとして、ヒュームは「会話する人々を取り巻く特定の人たちがもっている欠点や完璧さ」というものを挙げている(1 段落)。人間がもつ欠点や完璧さとはすなわち、ヒューム道徳哲学の核ともいえるべき、「人々の性格特性 character trait」に他ならない。従って、ヒュームは「社交・会話」と「道徳(及びそれに関わる性格特性)」との間に密接な関係を認めていると言えるだろう。このことは、『人間本性論』及び『道徳原理の探求』に、一言一句違わず見られる次の言明のうちに確認することができる。

それゆえ、社交や会話における感情の相互交流によって、われわれはある一般的で変化しない基準を形成する。そしてこの基準に従うことで、われわれは性格や礼儀作法を是認したり否認したりするのである。(T 3.3.3.2; SBN603, EPM 5.2.42; SBN229)

このようにヒュームは、「社交・会話」において感情や意見が取り交わ

されることによって、ある種の道徳的基盤が形成されると考えていたと言えるだろう¹⁵。

ところが、ヒュームの前の時代、すなわち 17 世紀においては、聖職者を養成するための機関である大学や修道院が学問や知識を独占し、宮廷を中心とした「会話の国」との接点を持たないままであった。これにより、「学問の国」と「会話の国」はそれぞれが弊害を被ることになったのである(2 段落～4 段落)。時代を下って 18 世紀に入り、たしかに「学問の国」と「会話の国」との間で連盟が締結されるようになりつつあった。しかし、ヒュームにしてみれば、その連盟は「相互の利益のために、さらに改良されることが望まれてしかるべき」である。

そこでヒュームは、交際の役に立ち、交際の楽しみとなるものを「学問の国」から「会話の国」へと自分が率先して輸入すると宣言し、そのような役割を担う「外交官」あるいは「大使」として自分自身を任ずるのである。そしてこの輸入作業のための最良の手段としてヒュームが考えていたものこそ、「エッセイを書く」ということなのであった。

以上に見たように、本エッセイにおいて中心的に語られている「社交・会話」というものに着目すると、『人間本性論』、『道徳原理の探求』そして『道徳・政治論集』を、同じ地平のもとに捉える途が開かれる

¹⁵ 『道徳原理の探求』では、次のようにも述べられる。「われわれが人々と会話をすればするほど、そしてわれわれの保つ社交 *social intercourse* の範囲が広ければ広いほど、われわれはこれら〔道徳〕の一般的な選好や区別に一層通じるようになることだろう。」(EPM 5.2.42; SBN228)

ように思われる。そしてこの捉え方を、ある程度妥当と考えることができるのならば、「社交・会話」に注目することは、ヒュームの道徳哲学を理解する上で有益な手段のひとつとなりうるものであると考えられるのである。

3. 文明社会、道徳と「女性」

6段落以降ヒュームは、「会話の国」の内実を掘り下げて論じている。すなわちヒュームは、「会話の国」において中心的な役割を担っている存在としての、分別があつてしかも教養を身につけている「女性たち Fair Sex」について語りだすのである(6段落～7段落)。

「女性たち」とは「会話の国」における「主権者」とされ、女性たちに接する際には、尊敬の念をもってせねばならない(6段落)。ヒュームが女性に対して示す期待は実に高いものであり、それは知的・学術的領域における優秀さに対してまでも示されており、その程度は、同程度の知性をもつ男性に負けずとも劣らないと言われるほどである(7段落)。

もちろん、女性はその本性上、優しく愛情に満ちた気質に溢れているので、「女性に対する礼節 Gallantry」や「敬虔 Devotion」をテーマとする書き物に愛好の限りを尽くすことが多い(8段落)。それゆえヒュームは、この点に関する女性の悪趣味を是正するやうにと述べはする(9段落)。それでも、社交術や会話上手といった技術において男性より長

けている点で、ヒュームが女性に対する尊敬の念を変えることはない。

坂本も言うように、「文明化のプロセスにおける女性の積極的役割」へのヒュームの期待は高い。「女性独特の会話上手や社交術は……(近代の)都市における知識の社会的交換と人間性の涵養にとって不可欠の手段であり、会話と社交の技術が、社会の文明化にとって、本質的な役割をはたすのである¹⁶。」

なるほど、ヒュームの女性に対するこのような見解は、現代的に見れば批判の余地が多分にあるものかもしれない。しかしながら、「女性」というものに言及するのみならず、「女性」を極めて高く評価している点は、当時としては実に珍しく、また興味深いものであると思われる¹⁷。

では、社交や会話において女性が果たす役割とは、具体的には一体どのようなものであろうか。そしてその役割が、社会の文明化とどのようにリンクするのだろうか。この謎を解き明かす鍵が、『道徳・政治論集』に収められたエッセイ「技芸の生成と進展について Of Rise and Progress of the Arts and Sciences」に隠されている。

礼儀作法 manners を学ぶための場 school として、有徳な女性たちとの交際以上のものがあるだろうか。そこでは、互いに喜ばせ合

¹⁶ 坂本[2002]p.13

¹⁷ このように、ヒュームが女性について高い評価を示している理由のひとつとして、ヒューム自身が足しげく通ったサロンという社交場が存在し、そこで女性たちが中心的な役割を担っていたことを挙げることができるだろう。

おうと努力することによって、知らず知らずのうちに精神が錬磨されるに違いなく、女性の優しき softness と慎ましき modesty の模範が、彼女らを崇拜する人たちへと伝わるに違いなく、そして女性の思いやり delicacy が、礼儀 decency をわきまえないことで傷つけることがないように、すべてのひとに用心させるのである。(E p.134)

女性とは、優しき、慎ましき、思いやりなどの美德を、おそらくは本性上、男性以上に持っているヒュームは見なしていたようである。そしてそうした美德が社交・会話において具体的に現れるものが礼儀作法と考えられているようである。したがって、社交・会話における女性たちの立ち居振る舞いなどを模範とすることで、さらに言うならば、そのような立ち居振る舞いにおいて現れる美德をマネすることによって、われわれは礼儀作法を学ぶことができるのであり、それによって精神は錬磨されることになるのである。

以上から、社交・会話において女性が担う役割とは、礼儀作法をそこに参加する人々に対して教授するというものであることと了解できよう。では、この女性の役割は、社会の文明化ということと、どのようにリンクすることになるのだろうか。この問いを解き明かすためには、『道徳・政治論集』に所収されたエッセイ「技芸の洗練について Of Refinement in the Arts」が手がかりとなる。

社会が発展していくと、人々は勤労に精を出すようになる。これは物質的な豊かさを生み、それによって生活のゆとりが確保されるようになる。そのゆとりの時間は、人々を学問へと誘い、これによって人々の知識が増大するようになる。そして豊富な知識を獲得した人々は、これを仲間たちと語り合わずにはいられなくなるので、都市へ繰り出し、そこで社交や会話に興じるようになる。重要なのは、社交や会話においてわれわれ人間の精神に、いかなる影響が及ぼされるかということである。これについてヒュームは、次のように述べている。

人々が知識と学芸によって向上してだけでなく、まさに一緒に会話をするという習慣によって、そしてまさに互いの快や愉しみに寄与するという習慣によって、人間性が高まるのを感じないはずはないのである。かくして、勤労 industry、知識 knowledge、そして人間性 humanity は、解きがたい鎖によって一緒に繋がっている……。 (E p.271)

すでに、社交・会話において女性たちから礼儀作法を学ぶことにより、「精神が錬磨される」ということを確認しておいたが、上記引用でそのことがさらに具体的に、「人間性の増幅」と言い換えられることになる。「人間性 humanity」とは、『道徳原理の探求』においてはヒュームの道徳哲学の核として中心的に語られている徳であり、そしてまた『人

『人間本性論』においても、「他者にとって有用な自然的徳」の代表として語られていたものであった。さらに、「勤労・知識・人間性とは鎖によって解きがたく結ばれたものである」という叙述を勘案すると、それぞれが社会の文明化を特徴付けるのに不可欠の要素であることが理解できる。そして、それらの要素のうち、社交・会話によって人間性が増幅されるわけだから、そこで積極的な役割を担う「女性たち」は、社会の文明化に密接に関係してくるということになるのである。

なるほど、『人間本性論』や『道徳原理の探求』といった、ヒューム道徳哲学を考察する上で主に用いられるテキストには、「女性たちが社会の文明化において果たす役割」に関する叙述は見られない¹⁸。しかしながら、例えば『人間本性論』に限って言えば、第三巻第3部第2節において語られる「誇り」と社交・会話における礼儀作法との関係などは、まさに上記に見たような「人間性の増幅」に関わる議論と考えられる(T 3.3.2.10; SBN598)。とするならば、社交・会話というキーワードに着目してそれぞれの著作を眺めることで、「女性たち」の姿が、そこには一切現れていないにも関わらず、浮き上がってくるように思われるのである。

これまでヒュームの道徳哲学研究は、『人間本性論』第三巻のみに焦

¹⁸ もちろん『人間本性論』では、人為的徳論において「女性の貞節」が論じられている(T 3.2.12; SBN570-4)が、それは文明社会における女性の果たす役割ということとは、一切関係がない。

点を当てるか、あるいは『道徳原理の探求』を参照しながら論じられることが多かった。しかしながら、本エッセイを手がかりとするならば、これまではほとんど光が当てられてこなかった様々な要素、例えば「社交・会話」や、あるいはそこで積極的役割を担う「女性たち」などが、ヒュームの道徳哲学において少なからぬ重要性を担っていると考えられるのである。それらの要素の重要性が仮に認められるとするならば、「エッセイを書くことについて」は、ヒューム道徳哲学を研究する上で、新たな光を投げかける可能性を持つと言えるのではないだろうか。そしてそれゆえに、「エッセイを書くことについて」をこのたび翻訳したことは、ヒューム研究をある程度前進させることに資するものであったと、訳者は信じている。

[付記] 本稿は、平成 21 年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

(はやし せいゆう 日本学術振興会 特別研究員 PD [京都大学])